

現行母子保健システムの分析・評価・改善に関する研究

総括

分担研究者 高橋悦二郎

当研究分班の分担した研究課題は、巾が広く現在の母子保健システムのあらゆる分野を抱括していかなければならない。従って多くの研究協力者が各々の専門分野について担当した訳であるが、個々の研究の分析、評価のみに終わらず、総合的にわが国の母子保健システムを見直していくためには、専門的かつ客観的な評価が必要であると考えた。そこで、母性保健の立場から、自治医科大学附属病院松本清一先生、小児保健の立場から、愛育研究所 宮崎 叶先生、心理学的立場から聖心女子大学 岡 宏子先生に、評価委員をお願いした。3氏はこの骨の折れる仕事を快く承諾してくださり、昭和59年3月10日に行った「昭和58年度研究報告会」に出席頂いた。そして多くの助言と、今後研究を続けていく上での励ましを頂いた。この貴重な助言は「講評」としてまとめて頂き、本書に掲載することができた。紙面を借り、3氏に深謝の意を表するとともに、今後ともご指導を仰げることを囑望する。

さて冒頭に述べたごとく、当研究課題は母子保健のあらゆる分野にわたっていること、また本研究班は本年結成されたため、一部の研究は現状把握に止まっていることなどから、総括的な結論を出すに致っていない。以下、班内の個別研究課題をあげ、後に本年度の個々の研究成果を概略する。

〔昭和58年度 研究題目〕

1. 母子健康手帳の改訂に関する研究
2. 母親学級における精神心理面および栄養に関する指導方針に関する研究
3. 諸外国の母子保健制度に関する研究
4. 特殊ミルク安定供給に関する研究
5. 乳幼児保健指導のあり方に関する研究
6. 母子保健水準の地域格差
7. 乳幼児の身体発育に影響を及ぼす社会的環境条件に関する研究
8. 環境汚染の母子保健に及ぼす影響（油症）
9. 小児慢性疾患の疫学調査
10. 小児の食事と血清脂質に関する研究
11. 新しい母子保健指標の策定

1. この研究では、更に分担が分かれ、東京においては高橋らの幼稚園・保育園における母子健康手帳の利用状況の全国的調査が行われた。京都府では尾崎らが全国各都道府県44カ所の母子健康手帳を集め内容を検討し、さらに京都府における母子健康手帳の改訂箇所を紹介した。愛媛県では金森らが、母子保健従事者に対してその活用状況および改善を必要とする点等について調査した。三重県では石須らが、その利用状況について、母親側については文献的考察を行い、母子保健指導者側については質問紙による調査を行った。
2. 従来の母親学級は、身体的な事柄にかたよっているのではないかと、との指摘もある。堀口らは母親学級のカリキュラムを現状に適したものにすることを目的に、初年度は、母親学級を運営している側の

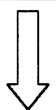
抱えている問題点を明らかにしようとした。

3. この研究はわが国の今後の母子保健のあり方や、さらには開発途上国に対する協力や援助をはかる上で必要な施策を考えるため重要である。本年度は「世界の母子保健水準」指標を作成した。
4. 青木らは52年新生児マス・スクリーニングが開始されて以来発見されたヒスチジン血症の治療のための特殊ミルクの改良開発を行うため、追跡調査表から、身体発育、血中ヒスチジン値、発達指数について検討した。北川らは、新生児マス・スクリーニングの効果を明らかにするため、早期発見され一定の基準に基づいて治療されている5疾患について、治療状況を総括報告した。
5. 高野らは、乳幼児保健指導の対象に関する問題点、地域特性を考慮した保健指導の問題点を明らかにすることを目的とし、更に分担を分けて研究を行った。北九州市では園田が、いわゆる北九州方式での乳幼児検診に関する検討を行い、改善すべき点をあげた。稲葉は、広島県における一貫した母子管理システム確立のため乳児健診の現状を分析した。小田らは、鳥取県における新生児死亡例、死産例の検討から、今後の周産期医療の進歩によりハイリスク児として生存してくる可能性を具体的な数字として算出した。尾山らは富山県砺波市における、これまで現状把握が充分でなかった新生児訪問指導状況について調査を行った。これに関連して、東京では高野らが、全国の保健所を対象として、新生児訪問指導の実態を調べた。その結果、里帰り分娩の増加、助産婦の高齢化、老人保健事業との関連など問題点を指摘した。特に里帰り分娩については、東京および近郊3カ所の保健所で実態調査を行い、現状把握を試みた。
6. 小泉らは、和歌山県における乳児死亡が全国都道府県の比較において悪い結果を示すに至っている点をあげ、母子保健、医療システムにおける問題点を明らかにすることを試みた。方法としては、衛生統計資料の収集、周産期死亡、乳児死亡例のケース・コントロール研究、保健所訪問聞き取りなどである。
7. 高石らは、昭和55年乳幼児身体発育調査の一般調査の中で得られた情報のうち①昼間の保育者②騒音の状況③日照の状況について身体発育への影響を検討した。またカウプ指数について、昭和45年値と比較を行った。
8. 辻らは、昭和43年以来西日本一帯に患者が発生したPCB中毒について、PCBの人体影響を明らかにし、今後の母子保健管理の資とするため①PCB汚染油摂取の母親から生まれた児の生下時体重②PCB中毒症が発生した年に生まれ現在中学3年生の主な口腔所見と歯列弓の発育状態、③母親から児へのPCB、PCQの移行(事例)について研究を行った。
9. 加藤らは、小児慢性特定疾患の医療給付台帳に基づいて全国調査を行ない、各疾患毎の申請患者数を把握、さらに総患者数の推定を行った。また医療給付制度の問題点をも言及した。
10. 梁は沼津市小中学生の血清脂質検査を行い、同対象で寿円が食事調査を行った。村田らは、東京都江戸川区の小学生の同一集団の血清脂質を4年間測定し、食事アンケートをもとに変化を検討した。楠らは肥満児の食事と血清脂質について検討した。いずれも今後さらに進んだ研究調査が待たれる問題点を指摘した。その中で大國らは、高脂血症児や肥満児を対象に、忙しい日常外来と独立させて充分指導のできる小児コレステロール外来の開設を提唱している。
11. 横田らは、新しい母子保健指標の策定のため、妊娠・出産・児の発育の過程を一貫して追跡することのできる調査票の作成を試みた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



当研究分班の分担した研究課題は、巾が広く現在の母子保健システムのあらゆる分野を包括していかなければならない。従って多くの研究協力者が各々の専門分野について担当した訳であるが、個々の研究の分析、評価のみに終わらず、総合的にわが国の母子保健システムを見直していくためには、専門的かつ客観的な評価が必要であると考えた。そこで、母性保健の立場から、自治医科大学附属病院松本清先生、小児保健の立場から、愛育研究所 宮崎 叶先生、心理学的立場から聖心女子大学 岡 宏子先生に、評価委員をお願いした。3 氏はこの骨の折れる仕事を快く承諾してくださり、昭和 59 年 3 月 10 日に行った「昭和 58 年度研究報告会」に出席頂いた。そして多くの助言と、今後研究を続けていく上での励ましを頂いた。この貴重な助言は「講評」としてまとめて頂き、本書に掲載することができた。紙面を借り、3 氏に深謝の意を表するとともに、今後ともご指導を仰げることを囑望する。